（＊はリポジトリ非登録箇所を示しています）

# 中京大学国際教養学部　経験交流会

主催：中京大学国際教養学部教育事業推進委員会
後援：中京大学教育推進センター

## 大学における教育と研究の接点
## ―基礎ゼミ運営の現状と課題―

開催日時：2017 年 11 月 1 日（水）16:40 ～ 18:10
開催場所：中京大学ヤマテホール（名古屋キャンパス 0 号館 2 階）
パネリスト：① 大内裕和 教授
② ましこひでのり 教授
③ 太田めぐみ 教授
④ 松浦明宏 教授
※いずれも中京大学国際教養学部教員
司　　会：手塚崇聡 氏

**司会（手塚）：**

定刻になりましたので、経験交流会を始めさせていただきたいと思います。

本日はお忙しいところ、お集りいただきましてどうもありがとうございます。非常に多くの先生方にお集りいただけて、もう少し机を大きくすればよかったなと今反省しているところです。それだけ非常に興味、関心のあるテーマだということにもなるかと思いますので、有意義な会になればいいかなと思っております。期待もさせていただいておりますけれども、どうかよろしくお願いいたします。

早速ではありますが、学長よりごあいさつを賜りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

**学長（安村）：**

こんにちは。今年も経験交流会が開かれること、大変うれしく思います。もう、かなり長く行われています、20 年くらいになるのではないでしょうか。全学的に FD 活動が論議される以前からです。

それはともかく、日頃、教員はそれぞれ研鑽を積み、工夫しながら教育活動を行っているわけですが、多少ともうまくいったこと―なかなかうまくいかなかったことなどを経験しています。そうしたことを分かち合い、意見交換する場を持ち、良い教育に一歩でもつなげていこうとの趣旨で始まったものでした。始まったころは教養部でしたが、部内の教

員だけでなく他学部の先生方にも話していただき、全学的なものとしてきました。時どきの学長も挨拶し、大学全体で教育を考える１つの場として定着してきたかと思います。毎回違ったテーマが設けられ、多彩な形で催されてきました。詳しくは毎年刊行されています『教養教育研究』をご覧になっていただければと思います。

今回は《基礎ゼミ》を改めて考えてみようということと伺っています。《基礎ゼミ》は大学設置基準の大綱化のあと教養教育と専門教育の新たな在り方を議論する過程で、今でいう初年次教育の一環として、大学で学ぶ上での基礎力を身に着けさせるべく、「読み・書き・話す」力を養うために設けられました。非常に重要な機能を担うものでした。その意味で、今一度振り返ってみることは意義深いことです。

昨今、必要性が話題にのぼる《初年次教育》については、本学におきましても大学全体のCP（curriculum policy）の中にそれに相当する科目を置こうということが謳われております。また、ご承知の通り、教育に関する全学的課題について毎年学長が諮問し、答申を得て、具体的施策を進めていく教育構想会議が機能しております。昨年の課題の一つは、改めて教養教育と専門教育の連携について考えていただくことでしたが、それに対する答申には「アカデミックスキルズ」という科目を設けることで初年次教育に全学を挙げて取り組もうということが含まれております。繰り返しになりますが、国際教養学部においては教養部の時代から、１～２年生、入学してきた学生たちにどうやって大学で学ぶかという点で、まず読む力を付けよう、それから、聴く力、そして話す力、発表する力、そうしたものを身に付けてもらおうという意味で基礎ゼミが始まったわけであります。当初は、基礎ゼミだけの経験交流会も行われ、今年はこうだった、ああだったと結果を分かち合い、その質の向上を目指して熱く話し合ったことを思い浮かべます。

今日は他学部の方がおられるかどうかは分かりませんけれども、たくさんお集りいただいています。実りあるものになるようにと切に願っております。言うまでもありませんが、教育力をアップさせ、その質の保証・向上を目指していくことは大学の責務でもありますから、よろしくお願いいたします。

**司会：**

先生どうもありがとうございました。では、早速ではありますが各先生方にご報告をしていただきたいと思います。

それでは大内先生からよろしくお願いいたします。

**大内：**

国際教養学部の大内です。これだけ大勢の方が集まるとは全然予想していなかったので驚いていますが、始めたいと思います。

今日は、基礎ゼミの経験について発表いたします。基礎ゼミは１年生であるということは共通しているんですが、この大学の基礎ゼミはさまざまな学部が集まっているところに特徴があります。専門の異なる学生が集まっている。これは非常にユニークなところであっ

て、難しい面はありますけれども、そのことをプラスに転じれば大変良い教育効果が得られるという特徴を持っていると思います。もう１つは、これは多くの大学に共通していますけれども、入試制度が大変多様化しておりまして、背景としている学力が異なっている学生が混在している。学部が混ざれば、一層さまざまな学力を持った学生が集まっているということになります。

読んだり書いたりする力を付けるということがゼミの基本だとすると、これについてはITテクノロジーが猛威を振るっているという感じがとてもします。学生たちがSNSやラインによるワンフレーズメッセージというものを日常生活の中で多用しているわけですから。論理的な文章を書かなくても、書き言葉を使わなくても生活できるという日常を過ごしている。これに対してわれわれは、説得力をもって物事を論じるために、書き言葉が読めて書ける学生を育成するという課題に日々直面しています。だから、彼らが日常的に使用している言語とは異なる言語を身につけるようにしなければなかなかうまくいかない。九州で最も偏差値の高いレベルの私立大学で教えている友人がいます。ゼミの学生にボキャブラリーのテストをやったところ、大体中２～中３レベルだという。そういう水準です。そうすると、学生が中２～中３の語彙力水準であることを前提に、どのようにして基礎ゼミを組み立てたらいいかということになります。

その中で私が考える１点目が、本を読む機会をつくるということです。この、本を読む経験の重要性というのを言わなきゃならないぐらい本を読む経験というのが学生にとってレアになっている。

この間、学生と一緒に本屋を巡るというツアーをやりましたら、文学部の１年生が「本屋に初めて来た」と言っていました。ということは、私と一緒に行って初めて、「本屋デビュー」したということです。文学部の学生でさえそうなのですから、本屋に行くということが彼らの日常からほぼ無くなっていることが分かります。

この本屋を巡る経験、本を手に取るということがここまで無くなってきていることを私たちは意識する必要があります。小説や物語は読む学生はごく少数いますが、それ以外の本を読んでいる学生はほぼいないという現状を考えますと、小説や物語とは異なる文章を読むという実践が必要になると考えます。ですから、私としては、小説や物語とは異なる文章の教材を選び、それを読むということをベースに置きます。

２つ目は「引用とコメント」というやり方です。学生たちのレポートあるいは意見でも大変困るのは、どこまでが本や論文に書いてあることで、どこからが本人の意見なのか分からない文章です。これを続けていますと、ある事実に基づいて自分の意見を述べるとか、ある事実に立脚して論拠をもって説明するということがいつまでたってもできません。ですから、右側に掲載されているのは基礎ゼミの最初に指導するやり方なんですけれども、具体的な本の引用のページ、何ページの何行目から何行目と書いて具体的に引用させ、その引用箇所についてのコメントを書かせるということをやります。章ごとに３カ所ぐらい、２章で大体６カ所ということになります。この課題は本を必ず読む必要がありますし、しかもこれによって書かれていることと自分の意見を分離する習慣が身につきます。ここを

経ないと次のリポートの段階にいかないというのが、この数年間学生を教えていての私の実感です。

レジュメまでは作りませんから学生にとっての労力はそう大きくありません。それからこの方法ですと、基礎ゼミ 12 ～ 15 名で考えますと、毎回３名ぐらいはコメントを書かせることができます。

基礎ゼミは半期 15 回しかありません。参加者全員に複数回報告させれば、１回目より２回目、さらに３回目とレポートが改善していくことが、半期の中でも学生自身実感できる。また、この報告ですと、１人の報告時間は５分前後で済みますから、３人やっても 15 分。それ以外で 70 分ぐらい取れば、あとの 12 ～ 15 名には必ず全員に私が当てて、一度は意見を述べるということが可能になります。ですので、私としては参加者全員が半期の基礎ゼミで複数回報告し、一回のゼミ中に参加者全員が毎回発言するということを心がけています。こうすると、基礎ゼミの時間中に学生が全く参加していないということが起こりません。複数回報告すれば報告の練習はできるし、意見を必ず言わなきゃなりませんから、学生は必ず課題の本を読んでくるということになります。この「読む」ということ、あるいは人前で発言するということ自体が不足しておりますので、そのことは基礎演習の中で意識的にやっています。

４番目は、学生との接触の中から、――「ブラックバイト」って言葉自体も考えたんですけど――「ブラックバイト」とか奨学金ということを、基礎ゼミでも取り上げているし、私の場合はさらにそれを研究テーマに選んだということがあります。私はこの大学に来るまで、アルバイトの問題や奨学金の問題は一切やっておりませんでした。中京大学に来て１年目に学生の奨学金問題と出会い、２年目に学生のアルバイトの問題に直面しました。これは学生にとって非常に身近なテーマでありますから、これをゼミで取り上げることによって学生に関心を持たせることが可能です。

今日は、「ブラックバイト対策弁護団あいち」のリーフレットをお配りしています。このエリアには専門の弁護団ができておりまして、多くの学生たちを違法状況から救っています。今の職場というのは人手不足が人為的につくられていて、人がいないから君がいないと困ると言って、学生たちを責任の重い基幹労働に従事させています。違法であったり、学生生活と両立しない働き方が広がっています。大学生活の最初の段階でブラックバイトの存在、困った時の相談先、労働法の基礎知識をちゃんと伝えることは、学生の４年間を大きく変えることになります。

私の調査からすると、日本の大学生の３分の２はほぼ「バイト漬け」生活といっていいと思います。この問題に取り組みませんと例え講義や演習を工夫しても学生は大学を離れて学習時間がほとんどとれないですから、学生の能力を向上させることは難しいと思います。ですので、この問題を取り上げることは大事だと考えました。

今日のテーマで研究と教育の関係というと、研究のテーマをどうやって分かりやすく教育するのか、研究テーマを分かりやすくどう説明するかという問題の立て方が多いと思うんですけども、私の場合は、むしろ学生の現実から出発して、それを研究テーマに発展さ

せる方向を選びました。この方向は、私は教育研究がテーマですからできるのであって、それを皆さん方に「同じようにやりましょう」とは言えないです。でも、研究から教育へというベクトルだけじゃなくて、学生の現実から教育の方法あるいや教育の内容を考えるというベクトルもあっていいんだと思います。そのことがもしかしたら皆さん方の研究の在り方とか内容にもいい影響を与えるかもしれません。つまり、それぐらい私たちの研究と学生の現実の間に大きな距離があるという、それをつなげることの困難というのが今日の議論のテーマになるのではないでしょうか。私の話は以上です。どうもありがとうございました。

**司会：**

どうもありがとうございました。非常に分かりやすい問題提起をしていただきましてどうもありがとうございます。では続きまして、ましこ先生どうぞよろしくお願いいたします。

＊

*

＊

**司会：**

ましこ先生、どうもありがとうございます。緻密な、また貴重なご経験に基づくご報告をいただいたように感じました。それでは次に、太田先生どうぞよろしくお願い致します。

**太田：**

まず、最初に、今日の経験交流会のタイトルに「研究と教育の接点」とあったのですが、私の授業の中に接点はないことをお断りしておこうと思います。私の授業の評価基準は平常点：50%、課題・レポート：30%、発表：20% としています。また、今年度の履修者は25 人でした。そのうち女性が 20 人と、女性が圧倒的に多いクラスでした。この後、15 回の授業でどんなことをやったのをご紹介するのですが、教材として何を使ったかをスライド上にマークで表示していますので、参考にしてもらえればと思います。教材のうち、書籍については主にこの３つのテキストを使いました。そのうち『知のナヴィゲーター』と『知へのステップ』というのは、ワークシートが CD に入って付いているので、それを使ったりもしました。

1 回目の授業ですが、大内先生も学生自身に大学生活の過ごし方を考えさせるとおっしゃっていましたが、私もキャリアにおいて大学というのはどういう位置づけにあるのかという話をしました。大学で学ぶということはどういうことなのか、大学時代にやっておきたいことは何なのか、ということを考えてもらうこともゼミの中に入れたいなと思ったので、最初にこのキャリアについての話をしました。次に自己紹介の時間を取りました。これは、学部が異なる 5 人のグループを作って行ったのですが、必ず質問するとか共通点を探して話題を広げるとか、コミュニケーションがあまり得意ではない学生も、発言する

機会が増えるようにアドバイスをしながらやるようにしました。その後で、ワークシートを使って、自分の高校までの振り返りをしてもらいました。そして、次の授業の最初に２分間のスピーチをしてもらうことにして、自身の振り返りと大学生活の目標も交えた自己紹介のスピーチの準備を課題にしました。

２回目の授業では最初に自己紹介のスピーチをしたのですが、その時にこのような採点表を作りました。持ち点を１人６点にしてそれを２～４人に配分して順位を付けていく相互評価の形にしました。２回目の授業のメインは、ノートテイキングだったのですが、このノートテイキングについては、後でもご紹介しますが、「ノートテイキングの方法を学んだが、レジュメを配る先生が多くて、実際には何も利用しなかった」という意見もありました。

３回目の授業からはリーディングを行いました。この回では、先に紹介したテキストを使って、文章要約につなげていくということをしました。ちなみに、この文章要約の課題は、「生命技術による人体格差を防げ」というタイトルのものでした。

４回目の授業のリーディングでは、社説の比較をしました。ちょうどこの授業の前の週に主要紙５社が同じテーマで社説を書いていた日があったので、それを使いました。日米経済協議に関する社説では、各社の論評の違い・視点の違いを抜き出したり、社説にタイトルを付るということをしました。もう１つ、辺野古の護岸工事に着手したという社説を使いました。これは、新聞社によって全然論調が違うので、面白いかなと思って学生に提供したのですが、学生は「辺野古って何？」という感じで、辺野古のことや沖縄の基地問題についてあまりにも知らなかったのです。なので、急遽予定を変更することにしました。次の授業でグループワークをして、辺野古の護岸工事についてそれぞれ意見をまとめてもらうことにするので、各自でこの基地問題について調べたうえで、自身の意見をもって次の週に臨みなさいということを課題にしました。

そして、５回目の授業でグループワークをして、それぞれのグループで護岸工事に着手した手続きについて、それが良いのか悪いのか、いろいろな視点で討論をしてもらって、発表をしてもらいました。きちんと調べてこなくて議論に入れていない学生がいたので、そうした学生を発表者に指名するなどして、緊張感を持たせてグループワークを進めるということをしました。発表が終わった後で、文章の書き方についてプリントを配布して説明をして、辺野古基地移転に関する小レポートを試しに書いてみようということを課題にしました。

６回目の授業では、まず、生涯にかかるお金の計算をさせてみました。これはなぜかというと、この回はグラフの読み取りをテーマにしたのですが、用意したグラブから、例えば、男性と女性で平均賃金にどのくらい差があるかとか、会社の規模によって賃金にどのくらい差があるかとかいったことを読み取って欲しいという意図だったので、実際に自分がこの先、生活していくのに、どのくらいお金がかかるのかということを知っておいたほうが現実感があって、課題に取り組めるかなと思ったからです。例えば、自動車は欲しいか／欲しくないかとか、海外旅行はどのくらい行きたいかということをざっくり計算させると。

そうすると２億円とかいう数字が出てくるわけなのです。そうなると、学生がグラフにある年収の変化を見て考えることや、書くことも変わってくるのではないかと思ったわけです。そして、この回の最後には、賃金格差に関するレポートを課題にして、きちんとレポートを書かせるということをやりました。また個別に課題の小レポートの評価もしました。

７回目の授業は「大学入試の是非・在り方について」というテーマでレポートを書いてもらいました。学生は入学してきたばかりで、みんなつい最近、大学入試を受けています。しかも様々な入試の種別で入ってきているので、大学入試の是非とか在り方について、いろいろな視点でのレポートになるかなということを期待しました。この回だけはスマホを使っていいということにして、実際に自分で調べながら、例えば新聞記事であるとか、官公庁が出している統計の結果とか、そういう資料を使ってレポートを書きましょうということにしました。そして、このようなワークシートを作って、大学入試は今の在り方で良いのか・悪いのかとか、部分的に賛成とか反対とか、入試改革についてどういうように思うのかということを書いていってもらい、レポートの形にしてもらいました。また、学生がレポートを書いている間に、課題にしていた賃金格差に関するレポートを個別に講評していきました。

８回目は、ライティングの続きで、前回の授業の際に提出してもらった賃金格差に関するレポートについて、全体に講評をしたり、参考文献の書き方や引用の仕方についてもう少し詳しく話をしました。その後で、レポートのトピックスの絞り方について説明しました。そして、実際にリスティングをしたり、ダイアグラミングなどの図を書かせてテーマを絞っていくということをやりました。情報の集め方とか情報の使い方についてもこの回に少し話をしました。

９回目は、ライティングからプレゼンテーションに入っていくのですが、まず、課題にした大学入試に関するレポートのチェック・修正を、グループワークでやりました。各自が書いてきたレポートを３人１組でお互いに読み合って、良いところ・悪いところに赤ペンを引いたり、コメントを書いたりして、それらを踏まえて、各自で書き直しをするということをやりました。プレゼンテーションについてですが、最初の授業で、大学４年間は人生の中の大きな節目と捉えてほしい。大学４年間の過ごし方によって、将来は大きく変わってくるし、選択肢も変わってくる。ということを話しています。それで、プレゼンテーションの題材として、よく就職活動の時にやる業界研究をやってもらうことにしました。なぜかというと、学生に将来の目標とか夢を聞くと、大体みんな公務員になりたいと言うのです。それで、なぜ公務員なのとか聞くと、安定しているからとか、地元に帰りたいからとか、大体そういう理由なのです。でも、それだとあまり夢もないし、世の中にはもっといろいろな仕事や会社があることを知らないだけでしょう？と思うところがあったので、それぞれ担当する業界を決めて、世の中にどんな仕事があるのか知ってみようということをレポート作成やプレゼンテーションを兼ねてやることにしました。

業界研究に関しては、レポートの提出とプレゼンテーションの両方をしてもらおうということにしたので、10回目の授業では、コンピューター演習室を使って、プレゼンテーショ

ンツールについて話をしたり、パワーポイントの使い方を説明しました。そして一緒に、メディアの特長やメールの出し方、研究室訪問の仕方とかいうことについても話しました。学生のほとんどが、メールは携帯やスマホでしかやっていなくて、いわゆるパソコンのアドレスにメールを送ったことがないとか、ファイルの添付の仕方を知らないとかいう学生が多いようでした。なので、その辺りを業界研究のレポートを兼ねてやることにして、例えばレジュメはメールに添付して提出することにしました。担当する業界については、学生に30業界ぐらいから選択してもらいました。レポートは2,400字以上で業界の概要をまとめて、図表を必ず付けることを条件にしました。だから、エクセルなどを使って図表を作ることにもなります。あとは、業界の規模とかトップ企業と２位の企業の比較をするとかいうことを入れ込みながら作成するように指示しました。発表は業界の広報担当者のつもりで、業界の魅力が伝わるように発表するという形で行うことにしました。

そして、この回の後に、コンピューター演習室で補講を実施して、パワーポイントの使い方や、文献の探し方、レポートの書き方などに個別対応できるような時間をとりました。

プレゼンテーションは、12回目から14回目の授業で行ったのですけど、プレゼンテーションの際に使うレジュメは、事前にメールで私に送ってもらい、私が印刷して用意することにしました。発表は７分、質疑は３分。授業内に発表をしない人には質問を義務づけました。業界研究のレポート自体の提出は14回目に設定をしました。業界研究の発表についても相互評価をしてもらって、例えば、構成の分かりやすさ、声の大きさや話す速度、スライドの文字や効果は適切だったかとかいうことを評価してもらいました。

最後の回でまとめをして、小レポートを書いてもらって、アンケートもやってみました。アンケートに関しては、ちょうど15回目の授業の前にこの経験交流会のお話をいただいたので、何かネタにならないかなという思いもあったのと、学生が自分の振り返りにもなるかと思ったので、無記名でアンケートに答えてもらうことにしました。その結果をご紹介したいと思います。

最初は、授業の満足度です。７段階で評価をしてもらったのですが、とても満足：7、満足：11、やや満足：4、ふつう：3、やや不満：1と、まあ満足している学生が多いのかなという結果でした。満足の理由としては、「大学生活で役立つことが学べた」、「レポートの書き方が分かった」、「プレゼンテーションの方法が学べた」ということでした。普通とか不満の理由には、「課題が多かった」というのが一番多かったです。私はそんなに課題を出したつもりはないのです。これまで見てもらって分かったと思うのですが、毎回課題を出していたわけではないのですけど、課題が多かったと感じていて、それば不満だったようです。あと、パソコンを使えない学生が結構いて、「パソコンの使い方を最初に教えてほしい」というような記述もありました。

次に、自身の授業への取り組み姿勢を評価してもらったのですけど、とても意欲的だった：3、意欲的だった：11、意欲的だった：5、ふつう：4と、おおむね意欲的に取り組んでいたということが分かりました。意欲的な理由としては、「自分の力になる」、「今後役立つということを感じたから」というようなことでした。意欲がそこまで高くなかった学

生の理由を見ると、「難しくて興味が持てないものもあった」ということが書いてありました。恐らくこれは、社説を読ませたりとかというところだと思うのですけど…。それと、やはり「課題が多かった」というところがあまり意欲的ではなかったという理由のようです。ちなみに、授業の満足度と授業の取り組み姿勢への関係は、相関関係がありまして（$p = 0.674, r < 0.001$）、やはりかという感じでした。

履修を友人とか後輩に勧めるかということも聞いてみたのですけど、勧めると答えている人は、「大学で役立つことが学べる」。どちらでもないという人は、「課題が多い」というのが理由でした。それから、役に立ったこと・役に立たなかったこと、あるいは役に立たなそうなことを聞いてみたのでが、複数回答でこのような回答でした（プレゼンテーション：18、レポートの書き方：15、ノートテイキング：6、メールのマナー：3、ディスカッション：3、レジュメの書き方：2、リーディング：2）。やはり、学生にとっては、プレゼンテーションとかレポートの書き方が知りたいことなんだということが改めてわかりました。あとは、先ほども言いましたが、役に立たなかったことの中にノートテイキングが入ってきているのは、授業によってはノートをとる必要がないということもあって、これが必要なかったと感じたのではないかということと、お金の計算をしたことの意味が分からなかったという意見があって、私ももうちょっと丁寧に説明する必要があったかなという反省にもなりました。

最後に、もっと時間をかけてほしかたこと、提案や要望について聞いてみたのですけど、レポートの書き方をもっと時間をかけてやってほしかったという回答が７件と多かったです。文章要約に６件の回答があったのですが、これはほとんどが文学部の学生だったので、文学部の学生は文章要約に対するニーズが高いのかなという印象を持ちました。あと、学生からの提案としてはこのような感じでした（いろいろ学べてよかった：10、課題が多くて大変だった：5、他学部の人と交流できてよかった：2、いろいろ考えることができた：1、配布資料が今後も役に立つと思う：1　など）。「優秀な課題を見たかった」という意見が１件ありました。これは、ペアワークやグループワークで課題を交換したりはしたのですけど、私が一番いいと思った模範解答というか、そういったものを見たかったということだと思います。それから、「机の移動がない教室はなかったのか」という意見もありました。私は、授業によって毎回机の配置を変えていたので、もしかしたら学生はそれが面倒くさかったのかなというようにも思いました。

それから、私の印象と提案なのですけど、所属学部によって役立つと感じる内容が違うのかなという部分がありました。先ほども申し上げましたけど、文学部はもっと時間をとってほしかったというものに要約が挙がっていたりとか、プレゼンテーションをもっとやりたかったというのは、国際教養とか国際英語の学生が多かったりするのですよね。心理学部とかデータを扱うような学生がいたので、グラフの読み取りみたいなのも入れたのですけど、その心理学部の学生が「役に立ちそうにない」というように答えたりもしていました。学生が望んでいるものと違うものを提供してしまったということもあるかもしれないのですけど、所属学部によって役に立つと感じる内容が違うのかなというところが印象として

ありました。あとは、パソコンの操作やオフィス系のソフトの使用経験によって、パソコンを扱うスキルのレベルが大きく違うので、もしかしたら春学期にそういったものを集中してやるような授業をとってから、基礎ゼミをとったほうがいいですよということをアナウンスしたほうがいいのかなと思いました。最後に、定員についてなのですが、25 人というのは中途半端な数字で、ペアワークすると１人余ってしまうし、グループワークで区切りのいい数字にすると５人１組になるのですけど、グループワークで発言を促そうとすると５人はちょっと多すぎる感じなのです。定員を 24 人にしてくれれば３人とか４人とかグループの編成がいろいろできるので、いいのかな。というように思いました。だらだらとした発表になりましたが、以上です。ありがとうございました。

**司会：**

先生どうもありがとうございます。反省点までご提示いただきましてどうもありがとうございます。それでは次に松浦先生お願いします。

**松浦：**

私が一番準備ができてなくて申し訳ないんですけども、いままでの先生方の話を聴いてると、全ての先生の基礎ゼミを半年ずつ毎回受ければいい卒論が書けるな、と。皆さんそれぞれさまざまな視点から各授業を構成されているので私自身非常に勉強になるわけです。私はどういう授業をやっているかということを紹介させていただきます。細かい字を全部読んでもらうつもりで出したものではないので話だけ、どういうことをやっているかということを紹介します。

これはシラバスです。概要に書いたことは、要するに、今まで高校で教科書や学校の先生の言うことを聴いて、それを覚えて試験で答えを書いて、それで勉強したという、そういう勉強の仕方をしてきたのをやめてもらって、自分で問題を探してその問題について考えるという姿勢を身に付けてほしいという、それが私の授業の一番大きな目的なのです。そのためにいろいろな課題というか話題というのを持っているわけですけれども、それはいじめとか体罰、自殺、虐待、あと、インターネット上でのコミュニケーション等々といろいろなものをもってきて、それを論じるということをやるわけです。ただ、そのためにいきなり議論するというものではなくて、それに先立って自分の意見を言ったり、人の考えていることを要約したりするという作業を、どのみち、議論とかプレゼンテーションの中で行うことになるので、そのための基礎作業として報告文や自分の意見などを書くときに論理的な文章を書くことができるようにという準備、文章を書いたり自分の意見を述べたりするときの準備として、最初２～３回、場合によっては４回ぐらいになるときもありますけれども、文章書きの練習をするということをやっています。

この内容というのは、基礎ゼミだけではなくて、私、紹介を忘れましたけれども、国際教養学部の教員で、全学教育の論理学もやってるんですけども、論理学で教えているようなことや、自分の学部ゼミの中でも教えているようなことも踏まえたことをやっています。

こういったこと、論理的な文章を書くというときの論理というのが論証ということなので、論証構造をもった文章を書くこと、これは、野矢茂樹や、戸田山和久という名古屋大学の先生の書かれた本などを参考にして、卒業論文を書くときにほかの人の本を読んで何を要約として書けばいいのかということを書いたようなところに必ず出てくる話が、その本を書いた人が何を問題にしているのかということをまず書けというふうに書いてあるし、その本を書いた人がその答えに対してどう答えているのかを書けと。その答えを出した理由を書けと。この３つ、３点セットを必ず書けと。要するに、その３点セットが書いてあれば書かれた文章を要約したことになるというふうにいっているわけなので、私もそれに沿って、問題・答え・理由の３点セットを必ず書くように、と。要するに、書かれた文章の中からそこのところだけを抜き出せば、それが要約だと。読書感想文、後から出てきますけれども、読書感想文とリポートの一番大きな違いというのは、引き出してくるものが違っているということです。読書感想文というのは自分が関心をもったとか、面白そうだと思ったところをピックアップしてくる。自分が嫌だなと思ったところをピックアップしてくるというのが感想文なんですけど、戸田山和久、野矢茂樹という、そういう人によると、自分が気に入ったところではなくて、本を書いた人が何を問題にしているのか、何を答えたのか、その理由は何か、その３つを引き出してこいという、引き出してくる対象が違うんだと。そういうことなのです。感想文を書いている人がこれをいわれると最初は戸惑うんですけど、書き方の基本としてこの３つをもってこいという、そういうことを最初にやっています。

もう１つは、パラグラフライティングというやつですけど、段落とパラグラフの違いを最初に勉強しておいたほうがよろしいのではないでしょうかという話です。段落とパラグラフの一番大きな違いは、文章の塊が論証構造を持っているかどうかということです。ts、ss、cs と小さな字で書いてしまったんですけど、トピックセンテンス、サポーティングセンテンス、コンクールディングセンテンスという、それぞれ役割を持った文がちゃんと、ある文章の、日本語でいうところの段落のように見える塊の中にちゃんとあって、それに沿った内容を書いていくことがパラグラフを書くことで、最初に書いたことと一番最後に書いてあることは内容的に同じだということで、結局、循環論証というのが形成されるんだというような話をして、それをちゃんと書いてもらうということを練習するということです。

次に、読書感想文と、リポート・論文要約との違いについて、さっき言ってしまいましたので省略しようと思ったんだけど、もう１つ、先ほど大内先生のお話の中にもありましたように、人の話をそのまま自分の意見として書いてしまう人が多いということと、感想文の書き方というところと何か関係があるのではないかと思うんです。感想文て、「私は、何々、と考える」というふうに書くんです。その書き方をそのまま要約のときにするという、人の考え方を書いているのに主語が私になってるといいますか、この文章を読んでそれをまとめなさいと言っているのに、「私は、何々、と考える」という主述 [「私は」と「と考える」] を付けて、内容（「何々」）はその文章ものをピックアップしているという、それ

を要約だと思っていることです。それは、感想文を書くことしかやっていないものだから、文の主語は全部「私」になってしまって、それでそういう文章になってしまうんじゃないかと思うんです。

もう１つ、「私」という言葉を使うなというふうに言うと、今度は「私」という言葉だけを外して文章を書いてくるんですけど、リポートの右肩に自分の名前が書いてあって、「これこれはこうこうと考える」というふうに書いてあるんです。それは、つまり、それを考えたのはおまえだろうということになって、「私はこう考える」と同じなんですけど、彼らにとっては違うことのように思えている。自分の名前を書いて「～と考える」と書けば、自分が考えたことになるということに気が付かない人がたくさんいるんです。そういったこともあるので、ちゃんと、考えたのは誰かということをはっきりと名前を書けというふうにも言っていますけど、引用の仕方というところの勉強にもなるんですけど、そういったことになる理由の半分ぐらいは、感想文ばかり書いているからじゃないかというふうに私は勝手に思っています。

あまり雑ぱくな話にならないように先を続けますけれども、あとは、これも野矢茂樹という人の本の中に書かれている内容を踏まえて、議論、紙上ディベートといったり、ディベートといったりするときの議論の要素ですけど、立論と批判と異論という３つの要素があって、立論というのは、ここでいうところの他人の意見、要するにリポート。他人の考えたことの要約。その要約を問題・答え・理由の３点セットと共に書くということをまずやるんです。その後で、それが間違っているということを言って、その上で自分の意見を、異論を立てましょうと。立論と批判と異論という、この３つを区別してきちんと自分の意見を言えるようにしましょうという、そういうことをやると。

ただし、この次の部分ですけど、実際のディスカッションの中でこういう立論・批判・異論という区別を立てて議論をするのはほぼ絶望的というか、まずできないので、ブレーンストーミングといわれるものですかね、片仮名でかっこよく書いていますけど、要するに井戸端会議みたいなもので、思ったことを何でも言えということをやっているわけです。その議論の担当者、プレゼンテーションをやってもらって何か発表してもらうわけですけれども、その担当者は、あらかじめ、ある問題についてあの人はこう言っているということを調べて、それを論理的に書いてもらって、それについて批判するなり、自分の意見を言うなりしたものを書いてきてもらい、それを発表するわけですけれども、その後でその発表内容についてブレーンストーミングみたいな、井戸端会議みたいなことを 20 分ぐらいやっています。それが終わったら、その担当者は、家に帰ってブレーンストーミングの内容を自分でまとめて、次の回の最初にまた新な報告書として出し、それでその人の発表・報告が終了。次の担当者は最初に自分でまとめてきた文書を書いてきてみんなの前で発表して、それを基に 20 分ぐらい議論をして、それが終わったら担当者は、授業が終わって家に帰って、次の週までに、それを新にまたブラッシュアップというかバージョンアップした文章を書いてきてもらって提出するということをやっているということです。実際その議論の中で立論・批判・異論という区別で議論しようとすると、分からなくなるので、

何でもいいから言ってくれという形でやっています。

もう１つ、教師は脇役で学生が主役というふうに書いたのは、先ほども言いましたように、学校の先生が何か言って教えてもらって勉強するという姿勢をやめてほしいというのが私の基本的な考えです。基本的に、学生さんが自分で調べてきて、調べてきた相手に対して自分の意見を言うという、そういう自律的な学び方を身に付けてほしいので、教師はなるべく脇役になって、教室の前には座っていなくて、脇のほうで座っているということをやるんですけど､なかなかそれがうまくいかないときがあります。教師は途中で何かしゃべらないといけないんですけど、教師がしゃべると、思っている以上に影響力が強いというか、学生さんのほうが重く受け止めてしまって、自由に発言できなくなってしまい、その議論が私の独壇場になってしまう。そういうパターンになりがちなので、どこまでしゃべったらいいのかとか、どこで間に入って議論をどっちかの方向に整理したらいいのかとかなかなか分からない、難しいんですけれども、とにかく私はあまりしゃべらないで学生さんが自分でしゃべるような形でやろうとしています。こんな形で、基本的には論理的な文章を書いたり、できるだけ論理的な形で話ができるようにという趣旨で授業をやってきました。

最後に一言。先ほどもどなたかが自分の授業についての学生さんの評価について触れておられましたけども、私も毎学期、基礎ゼミについて授業評価アンケートというのを提出しろといわれたことはないのですが、個人的に無記名で毎回アンケートをとってるんですけど、その中で一番面白かったというのは、やはりというか、立論・批判・異論、人の意見とそれを批判するということと、自分の意見を述べるということが違うことなんだというのを勉強したのが一番役に立ったというふうにいっている人が毎年多いです。

ということをご報告して私の雑ぱくな話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

**司会：**

松浦先生、どうもありがとうございます。学生の自発的な学修を促すという点で非常に分かりやすかったです。私は特に雑ぱくというわけでは全然ないと感じました。また、いろいろ問題提起もしていただいてどうもありがとうございました。では次に、米岡先生お願いします。

**米岡：**

国際教養の米岡です。今日は基礎ゼミの内容を紹介するということでご依頼を受けましたので、私が基礎ゼミでどのような授業を行っているのかをお話します。

私は、基礎ゼミを金曜日１限に設定したうえで、成績評価の重きを出席においています。なぜ金曜日の１限かというと、学生に早起きをしてほしいからです。これは大内先生のご発表とも関わるんですが、私の経験からみると、生活習慣が整っている学生とそうでない学生とでは、単位の修得に大きなひらきが生じているように思えます。また最近の大学で

は、出席が非常に重視されていて、学生の生活習慣と卒業までのプロセスのスムーズさというのが相関関係にあるだろうと最近の学生と話しをしていてよく感じます。そのため、大学にちゃんと来るという習慣を１年生のときに身に付けてほしいと言っています。

さて、基礎ゼミの授業内容は、口頭発表と相互批評を軸としています。大学生として話す技術と書く技術の基礎を身につけることが目標です。まず、口頭発表のほうでは、一般的なゼミで行うやり方で報告をしてもらっています。学生と相談のうえで私が選んだ、ヨーロッパ事情に関連する書籍を受講生の人数で分担して発表してもらうというやり方です。発表する前には、私が発表の仕方やレジュメの書き方について必ず解説をします。その際、強調する点は、発表の仕方や話し方を全て評価の対象とするということより、大学生活を過ごしていく上で、人の前で話すという経験が必ずあるためその練習だと考えて下さいということです。学生の中には、人前で話すこと自体を苦手と考えている人もいるので、私の授業では受講生にあまり緊張感をもたせすぎないように気をつけています。

さらにレジュメの書き方については、細かく説明します。とくに、これまでの基礎ゼミを受講した学生の中で非常によく書けていたレジュメを匿名にして学生に配布し参考にして下さいと伝えます。その際、「こういうものを配布されたら皆さんは発表を聴こうと思いますよね。きちんとしたレジュメを書くことが人の前で話すときには大前提になります」ということを強調するようにしています。

実際の発表では、各授業で３人ずつぐらい報告してもらうのですが、必ず質疑応答の時間を設けます。質問は受講生数に応じて、個人とかグループで対応してもらいますが、なるべく発表者全員に１つずつ質問をするということと、受講生全員が授業内で１回は何か話をしましょう、ということを求めます。その際、「まずは何か発言することが大事だよ」ということを伝えて授業を進行します。ただし学生に「質問して下さい」というと、例えば、パリってどこですかとか、ヒトラーって誰ですかとか、すぐに調べたらわかる質問がたくさん出ることがあります。そうしたことを念頭において、授業が進行するに伴い、質問に関して少しずつ条件を加えていきます。例えば、今日質問するときは「なぜ」から始めて下さい、というかたちでです。そうすると、学生は質問の内容を少し考えるようになります。また、学生の中には、「これについてあなたはどう思っていますか」と人に意見を聞く質問をする人がいるのですが、その際には、相手に意見を聞くときには、その問題に対する自分の意見を言ってから質問をしたほうが、コミュニケーションがちゃんと成立するので、そういう形で質問しましょうと、学生が質問をしたあとに簡単なアドバイスをするようにしています。

私から見ると、学生の多くは口頭発表を通じて、本を読むこととそれにもとづいて話すことのギャップを強く感じているように思えます。読んだ書物の内容を人の前で話せるということは、その内容をよほどしっかり理解していないと難しいことだと学生が確認する機会になっているようです。

また、自分が勉強したことを相手に正確に伝える場合には、できるかぎり丁寧かつ詳細にレジュメを作成することの必要性も学んでいるように思えます。それは、受講生の中に

ときどき、授業が進むにつれ、写真を入れていいですかとか、グラフを入れていいですかとか、表を入れたほうが分かりやすくなりますよね、と相談に来る人がいることに反映されているでしょう。その際私は、自分の伝えたいことを相手に理解してほしいと思ったら、ただ話せばいいわけではなく、相手を理解させるためにレジュメをどのように作成したらよいか考えてくださいと学生に必ず伝えています。

さらに、質疑応答に際して私は受講生に、質問の答えがわからなければ、「わかりません」とはっきり言って大丈夫ですと伝えています。学生の中には質問を受けたら、「本に書いていなかったことだけど、どう言ったらいいか分かりません、どうしたらいいですか」と私に尋ねる学生がときどきいます。それに対して私は、「今回の発表において、自分には分からないことがある、ということが分かったんではないですか」と述べたうえで、人の前で「分からない」と言うことは決して恥ずかしいことではないです、と学生にきちんと伝えるようにしています。そうすることで学生が、この授業に限らず、わからないことをどうすればいいか考え調べるきっかけになれば、と考えているからです。

基礎ゼミでは、以上の口頭発表に加えて、学生に相互批評というものを実践してもらっています。具体的な進め方は、以下のとおりです。1、新聞記事や書籍の一部などを配布し、1,000 字程度の要約を原稿用紙で各自作成して提出してもらう。2、私が、いくつかの書籍を紹介しながら、大学生の書き言葉として正しい日本語の表現（原稿用紙の使い方、段落分けの仕方、句読点の打ち方など）を簡潔に説明する。3、2 で学んだことにもとづいて、自分が作成した要約を確認する。4、受講者全員の要約を匿名にして、コピーして配布し、2 で学んだ内容も踏まえて、どの要約が一番読みやすいか、を順位付け（受講者数に応じて上位 3 ～ 5 点ほど）してもらう。その際、なるべく、要約を声に出して読んでもらうようにする。5、選ばれた要約について、なぜ読みやすく分かりやすいのか、受講生に議論してもらう。6、最後に、選ばれた要約と自分のものを各自比較しながら、2 で学んだことも踏まえて、各自訂正した要約を再度提出する。

以上の相互批評を通じて私がまず学生に理解してもらいたいのは、自分がこれまで使ってきた文章表現等に多々問題があるということに自覚的になりましょうということです。例えば、私が学生とのメールのやりとり等を通じて問題だと感じているのは、段落分けの仕方や句読点の打ち方をほとんど意識せず文章を作成する人が非常に多数いるということです。そのため、大学生としての正しい日本語表現があるのだということを受講生に分かってもらうようにしています。

相互批評の授業時、興味深いことに、読みやすい・分かりやすい要約を順位付けして選んで下さい、というと、私と学生間でもおおよそ一致します。そこで私は、選ばれた要約が、授業で説明した正しい日本語表現にある程度もとづいて書かれている点を確認したうえで、「皆さんは能力がないから分かりやすい要約を作成できないのではなく、正しい日本語表現のスキルを十分に身に付けていないからできないだけです」と強調したうえで、その基礎をこのゼミで身につけましょうと繰り返し伝えています。

また私はこの授業時に、学生同士で各自が作成した課題を見比べてもらうように心がけ

ています。通常の授業では基本的に、要約など課題を提出する場合、教員と学生のあいだでやり取りすることが多いと思います。教員が学生の課題にコメントを加えたり修正を施したりするのは非常に簡単ですし、学生にとってもその方が楽でしょう。しかしこの基礎ゼミでは、学生同士が、それぞれの要約を見比べて、同じように勉強している学生にも上手に書ける人がいるんだとか、上手に書けない人もいるんだ、とかいう感想を持ちながら、お互いの文章力や日本語表現の差を少しでも意識してもらうようにしています。その方がのちのち、学生が正しい日本語表現を真似したり、他の学生の表現技術を盗んだりして、文章力を向上させようとするモチベーションを上げることに、少しはつながるのではないかと考えているからです。

以上が基礎ゼミの授業内容となりますが、最後に、授業運営・内容に関する今後の課題を2点まとめておきたいと思います。1点目は、各学部における基礎ゼミの位置づけが十分に理解できていないという点と深く関わります。基礎ゼミの内容が、経済や経営などといった社会科学系の学部の学生にとって有益なものとなっているかは不安があります。実社会で役立つような知見ではなく、口頭発表の仕方や日本語表現などの基礎的なスキルを学ぶ基礎ゼミの在り方に、そうした学部の学生は少し物足りないという感想をもっているのではと彼らの授業態度とかを見ていて思ったりします。2点目は、グループワークをめぐる問題です。最近の大学ではアクティブラーニングなどの導入が推奨され、グループワークの実践も行われることが多いですが、私の授業では、例えばグループで、口頭発表について質問を考えさせたり、ある要約に関してディスカッションしてもらったりするようにすると、きちんと対応しようとする学生とそうではない学生が出てきてしまいます。後者の学生に対して何らかの制約等を課しても、状況があまり改善しないこともあります。そうすると真面目な学生の負担が大きくなるというアンフェアな状況が生まれることも時にあります。教員としてそうした状況を改善できればと様々な対策を考えていますが、なかなか難しいです。

今後はこうした課題も念頭におき、それらが少しでも改善されるような基礎ゼミの授業実践を考えていきたいと思います。本日は、ありがとうございました。

**司会：**

先生方どうもありがとうございました。非常に分かりやすく、またいろいろと課題を明確に提示していただけたおかげで、先生方の発表を聴いて、問題はどこにあるのかというところが、ある程度明確になったような気もしております。お時間が18時10分までということになっていまして、実はあと13分程度しかございません。できればここでディスカッションもしたいのですが、あまりお時間もないということもあり、各先生方へのご質問という形で進行させていただければと思うのですが、よろしいですか。それでは、パネリストの先生方に何かご質問があるという方は挙手いただけますでしょうか。

**千葉：**

英語系列の千葉と申します。今日はすごく刺激的な授業内容を聴くことができて楽しかったです。２点質問があります。１点目は、まず、リポート対策のときに先生方が気を付けていること。例えば、どの部分を具体的に添削しているのか。もしくは評価するときにどのような基準を使っているのか。そして、添削をした後に学生同士で見比べさせ、書き直すチャンスを与えるとも仰っていたので、先生方のリポートの扱いというものを具体的に教えてほしいです。２点目は、トピックは学生が自分で決めているのか、それともある程度教員が枠を出したり、具体的に質問を与えたりしているのか。その論文のトピックの出し方を教えていただけるとありがたいです。

**司会：**

今のご質問は全員宛ということでよろしいですか。

**千葉：**

はい。

**司会：**

それでは２つのご質問、リポートの扱い方と論文のトピックの出し方について、大内先生からよろしくお願いします。

**大内：**

リポートの添削だけじゃなくて普段の報告もそうなんですけども、文章を書かせますと、段落の頭を１字下げない学生が大量にいて、そこから指導します。また、句点が付いていない文章、文末表現がばらばらな点を注意します。書き言葉の文章表現として成り立っているかどうかも重要なポイントです。基礎ゼミのコメントを書かせますと、これらの欠点が露呈しますので、毎回のゼミの時間に直接注意して訂正します。一字下げのこと、句点のこと、段落分けのこと、文末表現などを普段の演習で指導しておくと、リポートでは、もうちょっと内容的なレベルで評価ができます。内容以前の書き言葉の日本語表現の段階で指導が必要な学生が大勢いますので、この点は大きな課題です。

それから、リポートのトピックについては、演習でのテーマと関連させて私から設定しています。

＊

＊

**太田：**

最初は、やはり、原稿用紙の使い方とか接続詞の使い方とかそういうことがメインになってきて、論理展開みたいなところまではなかなか指摘できないというのが実情だと思います。文章がきちんと書けてきて初めて中身を指摘できるかなという感じです。文章の書き方とかレポートの書き方に関する資料を作って学生に渡しているので、学生はそれを見ながら作ってくるということになるので、そこのポイントに合っていない部分はどんどん指摘していくという形になっています。

私は、レポートのテーマは設定しているということです。

**松浦：**

リポートを採点するときのポイントです。期末リポートは出さないので、ディスカッションのときに用意してくるものと、次の段階で出してきたもの、そのリポートについてのコメントですけれども、先ほども話しましたように、基本的に要約するときには問題と答えと理由という３つのポイントが明確に出ているかどうかというところがポイントなので、簡単にいえば、「問題」という言葉が書いてあるかと。あるいは問題という言葉が書いてあっても疑問文でそれを書いてるかと。原発について問題にすると決めたとかそういう形で書かれても、それは問題を決めたことにはならないので、原発についていったい何を問題にしたのかということを疑問文で書けというふうに言っていますので、疑問文で問題が書いてあるかどうか。その問題という言葉が書いてあるかとかそういうところです。それに対する答えという言葉が書いてあるかとか、結論という言葉が書いてあるかとかそこが問題。ちゃんとパラグラフが区切られているかどうか。冒頭１字空いてるとかそういうことも含め、そこで改行されているかということと結論という言葉が出てるか出てないかとか。次は理由ですけれども、「理由」という言葉が書いてあるかとか、理由を表す言葉、「なぜなら」とかそういう言葉が書いてあるかとか、そういうふうに答えているかいないか、答える答えないというのもいろいろで、ケースバイケースということもありますけれども、そういうふうに問題・結論・理由というその３つがちゃんと書いてあるかというところがポイント。

あと、先ほどはあまり詳しいことは言えませんでしたけれども、人の話をまとめている部分と、それを批判している部分と、対案、自分の意見を述べている部分とちゃんと区別されているかとかそういうところを見ているということです。それが書いてあれば、私は内容はほとんど問わないというか、何を言おうが自由という、よほど見当違いのことが書いていない限りは、どんな意見が書いてあっても100点。私が点を付けているのは形式です。

あとはテーマですか。最初の段階は、私が出します。消費税が８パーセントから10パーセントへあげるべきかどうかといった、そういう話とか、安保法制改正すべきかどうかとか、原発は再稼働すべきかどうかとかそういうテーマを一覧表にしたものを渡して、この中から自分の好きなものを選んでやりなさいという形ではやるんですけど、一巡して２回目ぐらいになると、あとは全部自分で自由にテーマを選んできて発表してくださいというふうにやっています。以上です。

**米岡：**

私の基礎ゼミでは、要約の課題についてもこちらが事前に指定したもので行っています。というのも、これまで発表された先生方より、もっと基礎的な力を身に付けることをゼミの授業目標としているためです。私は、学生が自ら課題を設定できるようになるためには、ある程度読解能力や情報処理能力が培われている必要があると考えています。基礎ゼミでは、そうした力を身につけること以前に、読んだ文献にもとづいて人前で話したり、日本語を正しく表記したりできるかどうかという点を重視しているので、私のほうで課題を設定するようにしているのです。また、学生によっては、指示に従わないまま、要約の訂正を非常に簡単にすませようとする人もいます。ただ赤線を引いて「ここが違う」と書くだけの学生もいるのです。それに対して私は、学生が一度訂正した要約を出させて、私のほうでチェックするようにしています。そのうえで、訂正が不十分な学生に対しては、きちんと訂正された他の受講生の要約も示しながら、「ほかの人はこれだけきちんと訂正しているので、再提出して下さい」と説明して、フィードバックするようにしています。

**司会：**

よろしいでしょうか。時間的にはあともう１方ぐらいご質問は可能かと思うのですがいかがでしょうか。

実を言うと司会の私は結構質問がありまして、３つか４つぐらいいろいろ考えているのですけど、その中で、司会の特権で１点だけご質問させていただければと思います。最後の米岡先生のお話の中で、学部ごとのゼミの位置づけというのは難しいということと、そもそも基礎ゼミ自体を１年生からやっていくということがあって、それぞれの先生方でどういうふうに学生のやる気を出させるかということで非常に工夫をされて、ましこ先生ですと「単位を餌にする」という表現もありましたし、太田先生は現実感をもたせるというお話があった中で、松浦先生は自律的にやらせるということを意識されていたりなどのご報告がありました。そうしたお話があった中でかなり気になっているところがあって、そ

のやる気を４年間、４年生までどう継続させるか。つまり、米岡先生の話ですと、習慣づけていくようなお話があったんですけれども、要は、１年生で半期やって、学生からすると単位が取れた、これで終わりだというふうになってしまうと、先生方がどれだけ苦労されても実らないというところもあるかもしれません。できればその点で、疑問と感じられているところでも構いませんが、もし基礎ゼミ終了後にどういったことを学生に続けさせることが重要なのかといったところのお考えがあれば、お聞かせ願えればと思います。

**大内：**

今日の発表は基礎ゼミ半期15回でどうするかということで設定されていますが、おっしゃるように、その15回を４年間の中にどう位置づけるのかということは重要です。１年生ですから、その後にどういう分野を学ぶ場合でも必要になることをこの基礎ゼミでは最優先するというのが第一点です。ですから、本を読む機会をつくること、文章に書かれていることと自分の意見をちゃんと区別すること、報告の機会をつくって発表の練習すること、大学生活の過ごし方を考えさせることなどを重視しています。基礎ゼミの学生とはパーソナルな関係ができることもありますから、基礎ゼミ後も私が学習のアドバイスをする学生は出てきます。全員に対しては、基礎ゼミの最後の機会に学部別に推薦図書のリストを作って、学部の専門を学ぶ前に有益な本を紹介しています。

それから、１年の時に基礎ゼミに出た学生のなかには、１年間の私の教養テーマゼミに参加する学生もいます。そこでは基礎ゼミの経験が生きてきます。

＊

**太田：**

私は、アカデミックスキル全般みたいな感じで授業をやっていて、内容としてはほかの先生に比べると１つ１つがちょっと薄くはなってしまっているとは思うのですけど、大学

生活のどこかで「あぁ！」と思える機会は多分あるのかなと思ってやっているというのと、あとは、とにかく大学４年間が人生の中での大きな節目なのだということは折に触れて言うようにしています。自ら調べる・自ら動く・自ら考えるということをやってもらいたいということは伝えるようにはしています。すみません、答えになっているかどうか分からないですが。

**松浦：**

私、基礎ゼミが終わった後どのようなことを学生さんに期待するかということを少し。これは授業の目的をそのまま繰り返すだけなんですけど、高校までの教えられて勉強するというやり方、そういう考え方をなるべくしないように。もちろん大学の授業の中でも教えられて勉強するという授業はたくさんあるので、そういう授業は全く無視していいという意味ではないですけど、それ以外にも勉強というものはあるので、本当に大事なのは全然答えが見つかっていないような問題に取り組んで、答えが出せるかどうかは分からないけれども、とにかく答えを出そうとする姿勢が大事だと私は思っているので、なるべくそういうことができるような、そういうことにチャレンジしてもらえるような、そういうことを続けていってほしいというのが私の希望です。以上です。

**米岡：**

私の基礎ゼミでは、日本語で話すことと書くこと、という基礎中の基礎に重点をおいています。そのため、学生の中には、「なんだ、日本語をわざわざ学び直すのか」という態度をあからさまに見せる人もときにいます。彼らからすれば、大学では英語や別の外国語を学びたいのに、わざわざ日本語の表現方法なんて勉強する意味あるの、ということなようです。その場合私は、「これから皆さんは英語とか外国語に触れる機会もありますし、外国で働く人もいるでしょう。そういうときに外国語を学んだ経験はとても大事です。でも日本語がきちんとできなくて、外国語ができる人というのは多分ほとんどいないですよね」と学生に伝えるようにしています。私の専門は、歴史学、とくに西洋史で、外国語に触れる機会もあれば、外国の方に接する機会もありますが、やはり自分たちの言葉がきちんと読み書きできなくて外国語ができるということはほとんど聞いたことがありません。そうした経験にももとづいて、大学ではまず、英語などの外国語より、正しい日本語表現を身につけてほしいと強調することが多いです。

**司会：**

皆さんありがとうございました。お時間は過ぎてしまいましたけれども、またもし何かご質問等ありましたら、直接各先生方にお答えをいただくという形でもよろしいのではないかと思います。

長時間にわたりいろいろと面白いお話を提供していただきまして、まずはパネリストの先生方、どうもありがとうございました。

私自身は先生方のやられたアイデアを、実は使わせていただこうかなとも思っておりますけれども、できれば今後もこういった形で先生方と情報を共有できればなと思っております。

本日はお忙しいところどうも皆さんありがとうございました。それではここで経験交流会を終えさせていだきたいと思います。